

2月5日（月）大阪市立阿倍野防災センター

■研修先：大阪市立阿倍野防災センター

体験型防災学習センター あべのタスカル

大阪市阿倍野区阿倍野筋3丁目13番23号あべのフォルサ3F



■報告者：坂井秋子

■報告：専任スタッフによる説明つき「タスカルコース 60 分」の体験コースに参加。「自助」について学び、体験コース終了後館内見学。

■「タスカルコース 60 分」体験内容

- ① タスカルシアター ②減災を学ぶ ③消火を学ぶ ④煙を学ぶ ⑤津波を学ぶ ⑥がれきの街（余震体験） ⑦震度7体験 ⑧振り返り学習



「あべのタスカル」は、東日本大震災をはじめ近年発生した災害の教訓や、南海・東南海地震や南海トラフ巨大地震などの大災害に備えるため、それまでの展示内容を最新の技術を用いて一新し、平成31年4月にオープン。自分の住む地域の特性に応じた災害危険を認識することで自分に必要な知識や技術を選択し、体験を通じ学ぶことができる体験型防災学習施設。JR、オオサカメトロ、近鉄の各駅から歩いて約5分程度とアクセスも良く、施設自体もまだ新しく明るい印象。最新の技術を用いた展示や、「キッズしょうぼうパーク」など、子どもが興味を持つよう

工夫されている箇所が多々見受けられた。13種類の体験学習エリア、7種類の体験コースがあり、小中学生から事業者向け（大人）まで幅広く設定されている。最大120分のコースでは防災体験に加え、避難支援、救助、救護も体験できる。また、リアルに災害の恐ろしさを体感する高さ6Mの巨大スクリーンや災害発生直後の街などが実寸大のセットで設置されており、津波体験では建物が浸水していく様子を音とプロジェクションマッピングで表現し、南海トラフ巨大地震発生時の大阪市内予想津波高を実寸大で体感。その他、大阪市内全域の被害想定や地域特性に応じた災害危険を学ぶ「おおさか防災情報ステーション」、避難グッズの展示、また、大型モニターに電子ペンで書いた「防災対策」が撮し出されるなど、子どもから大人までが体験学習、体験コース、多数の展示などを通しいつ起こるかわからない災害に備え、まずは家族、周りの人を助ける「自助」を第一に、そして「共助」についても学べる施設である。当日も多くの小学生から大人（個人・団体）が訪れており、過去に大きな災害を経験した地域柄もあり防災意識の高さを感じた。当市としても引き続き防災に対する出前講座、市民の避難訓練を通し、まずは「自助」についての具体的な知識を得られる機会を今後、増やしていくことの重要性を感じた。



2月6日(火) 京都JAビル

■研修先：京都JAビル

(株)廣瀬行政研究所 075-681-5169(京都JAビル)

■報告者：枝廣晴基

■報告：(株)廣瀬行政研究所、鍵屋一氏(跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部教授、元板橋区危機管理担当部長、板橋区議会事務局長、一般社団法人危機管理教育研究所主席研究員)による自治体の防災・減災マネジメントと災害時の議会・議員の役割についてのセミナー受講

■スケジュール：午前 基礎編 10:00~13:00 午後 実践編 14:00~17:00



内閣官房地域活性化伝道師でもあり、地域防災全般、特に自治体の防災対策や災害時の要擁護者支援、福祉施設の事業継続計画(BCP)地区防災計画などを研究、実践、講演している、鍵屋一氏によるセミナーを受講。日本はその位置、地形、気象等などの自然条件から、世界でも稀にみる災害多発地域である。能登半島地震の被害状況が日に日に明らかにされ、近い将来には南海トラフ地震が大いに危惧されている中、当日は全国から多くの議員が参加し東日本大震災の教訓も踏まえた自治体防災対策の深掘りと実例や、議会 BCP と議員の行動規範等、グループワーク(ワールドカフェ)も含めた講義内容。「災害への備え」は、「被害防止対策」と「災害対応準備対策」からなるとされ、「被害防止対策」は国土保全対策、建物、施設、設備の耐震化・保守管理など、ハザードによる被害の発生を予防・抑制するための事前対策が重要であり、「災害対応準備対策」については、体制整備、備蓄や資機材等の整備、訓練など、災害時に実施する災害対応業務を迅速かつ円滑に実施するための事前対策の必要性を学ぶ。災害への備えは広域に渡る中で、被災自治体が行わなければならない業務(計画策定・標準化)や、自治体が他の主体に応援・支援を求められる業務(官民パートナーシップ)、自助・共助が中心となる取組(支援・連携)等の日々の確認や訓練はとても重要なものであり、有事の際の限られた時間の中、公助と自助・共助がしっかりと相互協力をし合える体制作りは、全国自治体の更なる課題でもあると感じた。地域防災計画や条例が災害から地域住民の命を守るものであるならば、日頃から住民、自治体が防災の重要政策を“見える化”して“共有化”し、その政策の縦割りを超えて総合的、継続的に実践し、計画や条例、訓練への住民参加等で自助・共助の重要性を明らかにし、住民自身が防災の担い手となることが減災や二次災害を防ぐ最も有効な手立てでもあると感じた。阪神・淡路大震災



においては、瓦礫の下から市民によって救出された人数は警察・消防・自衛隊によって救出された人数の3倍以上にのぼるとされる。災害時における互助・共助とでも言うべき地域コミュニティの重要性、また地域、自治体における防災活動の更なる推進が図り、求められている中で、今回のセミナーは新たな学びが多く、当市における今後の防災計画や活動にも大いに参考になるものであった。

2月7日（水）京都市市民防災センター

■研修先：京都市市民防災センター

京都市南区西九条菅田町7

■報告者：新井 優也

■報告：館内は自由見学ですが数十分間隔で各体験室にプログラムが組まれており説明員からレクチャーを受けたのち体験。その後館内視察。

体験内容

① 避難体験室 ② 消火体験室 ③ 強風体験室



「京都市市民防災センター」は、災害時に不可欠な防災知識や行動を「見る」、「聴く」、「触れる」、「感じる」ことで学べる無料防災体験施設である。震度4～7程度の横揺れを体験し、地震発生時の心構えと日頃の備えを紹介する「地震体験室」、ホテル火災をリアルに再現し、実普段体験できない煙の中の避難行動を体験する「避難体験室」、モニターに模擬火災を映写し、消火器（消化剤の代わりに水が噴射）や屋内消火栓設備での消火方法を学ぶ「消火訓練室」、風速32メートルの強風下における行動の困難性を体験し自然災害について学ぶ「強風体験室」などの災害の疑似体験室が設置されている。「避難体験室」では、火災時の煙の設定を少量と実際の煙で

は体に危険を及ぼすレベルの2段階を体験。後半の体験では、全く前が見えず、どこに向かえば良いのか迷ってしまった。懐中電灯は煙と同化してしまい使用は困難であった。足下の非常灯を頼りに出口へと向かった。今まで火災の現場に遭遇したことがなく、現実となると少し恐怖を感じた。こちらの体験施設は、市民により一層の防災知識や活動能力を高めるため、利用に予約の必要はなく来館した当日に、体験可能な体験施設のスケジュールを確認し、各自、自由にプログラムを体験できるという点で視察当日も団体はもちろん、小さな子ども連れの家族や個人でも多数来館されていた。こちらも大きな災害を経験している地域柄か、防災意識の高さが伺えた。また当施設では防災ビデオの貸し出しや防災用品の販売、4階には講習室が用意され、消防・防災各協会の講座も予約制で参加でき、まさに街の防災拠点施設という存在であった。当市において、いつ起こるか予想できない災害に対し、いざという時の為に「見る」、「聴く」だけではなく「触れる」、「感じる」が重要であり、市民参加の防災訓練等で地震体験車などを活用し「体験」コーナーを体感することが自治体、また我々市民にとって一番の防災対策と防災意識向上になると認識した。



2月7日（水） キッズプラザ大阪

■研修先：こどものための博物館 キッズプラザ大阪

大阪市北区扇町 2-1-7

■報告者：坂井秋子

■報告：館内展示物視察、体験コーナーの実施

1階 「どんなもん階」 3階 「つくろう階」 4階 「あそぼう階」 5階 「やってみる階」



「キッズプラザ大阪」は「子どもたちが楽しい遊びや体験を通じて学び、創造性を培い、可能性や個性を伸ばす」ことを基本理念に日本ではじめて、本格的な“こどものための博物館”として1997年7月に誕生。開館以来、近畿2府4県を中心に全国各地から毎年40万人を超える来場者を迎え、2022年12月には入館者1000万人を達成。関西テレビ放送が本社を置く「カンテレ扇町スクエア」の低層部に入居し、運営主体は一般財団法人大阪教育文化振興財団。にぎやかな「ボールサーカス」をはじめカラフルな装飾の1階で入場の手続きをとり、その後、視察の許可を取りに4階にある事務所へ。同フロアには、工作や実験を体験できる「キッズラボ」、本物のレジがある「キッズマート」など遊びながら仕事体験ができるスペースの他、団体用ロッカー、多目的ルーム、授乳室など一息つけるスペースも設置されていた。5階は科学・文化・社会などのカテゴリーごとに区分され、遊びながら学べる展示やワークショップがある。また、TVスタジオではニュースキャスター、リポーター体験が可能で原稿読みから録画まで一通り行い、その後は、スタジオ外のモニターに短時間で編集された動画が撮し出される。スタッフの方々が丁寧にサポートしていました。3階は、デジタルデバイスを使った次世代の「遊び」と「学び」の教育施設となっており、国内最大級のタッチスクリーンを導入しコンピューターを「ツール」として活用。アプリケーションの使い方だけではなく、「物事を深く考える力」「創造性」の育成を目指し、楽しく学べるテーマ選びをを心がけ、プログラムを実施。そして施設の中央には一際目立つ、全てが曲線で作られた迷路のような回廊、曲がった壁、形も色も違う窓など、カラフルなデザインの「こどもの街」が4階から5階の吹き抜け部分に設置されている。館内を一通り視察したが、スケールの大きさ、カラフルな装飾、よく考えら工夫された展示など一日中楽しめる施設である。当市の「あそびの広場」に於いて同様のスケールでの運用はスペース、費用の面で難しいと考えるが、「子ども達が遊びや体験を通じて学ぶ」また、「見せ方」という部分では非常に参考になる点が多々あり、今後生かしていきたい。

